

宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter（2-30号—通巻第41号—）

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter (2-30号)

発行：2023年10月31日

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter（第2期第30号—通巻第41号—）「伊藤誠教授を偲ぶ会特集号」をお届けします。

編集委員 横川信治 yokokwa [at] cc.musashi.ac.jp

伊藤誠先生を偲ぶ会 実行委員会

2023年2月7日に、日本を代表するマルクス経済学者の一人である伊藤誠 東京大学名誉教授が逝去されました（享年86歳）。

伊藤先生は大学における教育・研究のみならず、海外との学術交流、市民講座等でのマルクス経済学の普及などを通じて、広範な方々とのつながりを築かれてこられました。

伊藤先生からご指導をいただいていた私たちは、こうした多彩な分野の皆様とともに、今一度、先生のお仕事を振りかえり、その全体像を共有する場として「伊藤誠先生を偲ぶ会」を2023年9月2日に開催しました。

追想エッセイ

小幡道昭	伊藤経済学における総合の精神
横川信治	Bob Rowthorn 教授による追悼文
櫻井毅	伊藤誠君を偲ぶ
山田鋭夫	柔軟な学問的姿勢
柴垣和夫	伊藤誠君を偲ぶ
Robert Rowthorn	Obituary
Costas Lapavitsas	(ビデオメッセージ)

吉村信之 伊藤誠教授著作目録

Newsletter への投稿はワーキングペーパーの役割を果たします。ワーキングペーパーの著作権は著者に属しますので、幅広い読者の感想や意見を検討することによって、論文をさらに磨きあげ、学会誌や大学の機関誌で発表することが可能です。既発表論文の転載も受け付けますので、より多くの読者を得るために、「抜き刷り」の郵送の代わりにもお使いください。

この Newsletter は皆様の寄付によって維持されています。一人年間 1,000 円程度を目処にご寄付をいただければ幸いです。詳しくは、ご寄付のお願いをご覧ください。

「宇野理論を現代にどう活かすか」 Newsletter

編集委員：横川信治、植村高久、新田滋、清水真志、吉村信之、田中英明、清水敦

Editorial Board (English): Nobuharu Yokokawa, Richard Westra, Costas Lapavitsas,
Robert Albritton, Makoto Nishibe

顧問委員：櫻井毅、柴垣和夫

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学経済学部 横川信治

宇野ニュースレター「伊藤誠教授を偲ぶ会特集号」

担当編集委員 横川信治

伊藤誠先生を偲ぶ会 実行委員会

2023年2月7日に、日本を代表するマルクス経済学者の一人である伊藤誠 東京大学名誉教授が逝去されました（享年86歳）。

伊藤先生は大学における教育・研究のみならず、海外との学术交流、市民講座等でのマルクス経済学の普及などを通じて、広範な方々とのつながりを築かれてこられました。

伊藤先生からご指導をいただいていた私たちは、こうした多彩な分野の皆様とともに、今一度、先生のお仕事を振りかえり、その全体像を共有する場として「伊藤誠先生を偲ぶ会」を2023年9月2日に開催しました。

追想エッセイ

小幡道昭 伊藤経済学における総合の精神

横川信治 Bob Rowthorn 教授による追悼文

櫻井毅 伊藤誠君を偲ぶ

山田鋭夫 柔軟な学問的姿勢

柴垣和夫 伊藤誠君を偲ぶ

Robert Rowthorn Obituary

Costas Lapavistas Makoto Itoh Obituar (ビデオメッセージ)

https://www.youtube.com/watch?v=vWxW-y2b3_w

著作目録

吉村信之 伊藤誠教授著作目録

小幡道昭 伊藤経済学における総合の精神

本稿は「伊藤誠先生を偲ぶ会」(2023年9月2日)で業績紹介をした際の報告内容を若干拡張したものである。

* *

伊藤先生の最初の研究論文が公表された1963年から数えて、逝去された2023年までちょうど60年、この間に、先生が発表された著作は夥しい数に及ぶが、ここでは思いきって全体を三つのグループ(景気循環論、価値論、現代資本主義論)に分け、そこに貫く基本的な考え方(「精神」のようなもの)をあらためてふりかえってみたいと思う。

伊藤経済学の骨格をかたちづくる第一グループは、1974年刊の『信用と恐慌』に代表される「景気循環論」であり、その最大の特徴は「資本過剰論」である。周知のように戦後日本のマルクス経済学では、賃金上昇を恐慌の第一原因とする「資本過剰論」と、需要不足を第一原因とする「商品過剰論」とが鋭く対立していた。こうしたなかで伊藤経済学は、少数派の「資本過剰論」のつねに最先端を走りながら、同時に多数派の「商品過剰論」を総合する途を模索するところからはじまった。

この総合の精神は、好況末期における投機という「商品過剰論」的現象に対しても、積極的に理論的説明を与えようとした点に端的に示されている。労賃が継続的に上昇すれば、資本構成が相対的に低い商品生産物の生産価格は、傾向的に上昇すると一般に予想されるようになる。さらに資本主義的に生産を拡張できない一次産品なども含め、好況末期には、他の一般商品に比して傾向的な価格が上昇する一群の商品が存在することが理論的に示される。そしてこの種の商品群に対して、将来のさらなる価格上昇を見込んだ投機的在庫が、商業資本を先頭に信用を利用して大規模に形成される。こうした好況末期に特有の不均衡な発展を媒介にして、恐慌期の急性的な信用崩壊もはじめて説明可能となるのであり、さらにまた、この結果として生じる恐慌による破壊の部分性によって、不況の持続性も理論的に解明できるとされたのである。

これは、労働力の商品化を資本主義の基本矛盾だとして「資本過剰論」の基礎を築いた宇野弘蔵の『恐慌論』が、問題の本質を隠蔽するものとして商業資本や投機現象などを排除し理論的純化をはかるべきだとしたのと対照をなす。こうしたところに、「商品過剰論」か「資本過剰論」かという二者択一を回避し、狭い学派の枠組みを超えてマルクス経済学の「総合」を志向する精神がよく現れているように思われる。

1981年刊の『価値と資本の理論』に代表される第二の価値論にも、価値と生産価格の関係をめぐり「総合」の「精神」が貫かれている。戦後日本のマルクス経済学では、総価値＝総生産価格、総剰余価値＝総利潤という「総計一致の二命題」をもって『資本論』の「価値の生産価格への転化論」を支持する多数派と、価値と生産価格の間には「次元の相違」があるとして、この転化論を疑問視する少数派が対立していた。伊藤三表の核心は、労働時間が対象化された商品が生産価格で売られ、生産価格で買い戻される過程に即し、「対象化された価値の実体」「生産価格としての価値の形態」「取得される価値実体」という三つの表を用意することで、労働時間単位の第一の表とドル単位の第二の表の間において少数派の「次元の相違」論を堅持しながら、ともに時間単位となる第一の表と第三の表の間に「総計一致の二命題」に相当する関係を読みとるという妙手によって、「価値の生産価格への転化論」と「次元の相違論」を「総合」したところにある。

この三表のアイデア自体は、直接には、欧米「転形問題論争」の検討のなかから生まれたものだった。もともと『資本論』の生産価格論は、マルクス自身も気づいていたように、費用価格のほうを投下労働時間に比例した「価値（どおりの）価格」にしたまま、生産物の価格だけを、一般的利潤率をもたらず生産価格に更新するという難点をかかえていた。

この限界を回避したボルトチェビッチの解法がP. スウィージーの『資本主義的發展の理論』によって発掘評価されたのを契機に、費用価格のほうも生産価格化した場合に「総計一致の二命題」がはたして成立するののかという問題をめぐり、いわゆる「転形問題論争」が、1950-60年代を通じて欧米マルクス経済学の焦点となった。そしてこの論争を通じて、「費用価格の生産価格化」のもとで「総計一致の二命題」が同時に成りたつには特殊な条件が必要であり、一般には二命題の一方を前提にすれば他方が成りたないという二律背反の関係があるという認識がほぼ共有されるに至っていた。こうした状況に対して三表アプローチは、第一の表から第二の表を導く方法自体は、1時間何ドルとするという「次元」の問題に工夫はあるものの、基本的にはボルトチェビッチ=スウィージーの解法によるものであるが、これに第三の表を追加することで、生産価格に媒介された第一の表と第三の表の間に、二命題の同時充足に相当する関係を読みだすかたちで、一つの回答を与えんとする独自の試みであった。

要するに、伊藤三表のアプローチは、日本のマルクス経済学のなかで培われた「次元の相違論」をベースに、欧米マルクス経済学の「転形問題論争」に新たな解決の道筋を与える新たな「総合」であった。欧米マルクス経済学との「総合」の試みは、価値論の領域にとどまらない。伊藤経済学には、さまざまな領域で、日本のマルクス経済学を欧米の研究に向けて開いてゆこうとする精神が貫かれているといえる。

1990年刊の『逆流する資本主義』を皮切りとする第三の現代資本主義論の狙いもまた、段階論と現状分析の独自の「総合」にある。この著作が刊行されたのは日本のバブルが崩壊した直後のことであり、そこで提示された現代資本主義の「逆流現象」は一九七三年のオイルショックにはじまる。グローバリズムや新自由主義（ネオリベリズム）といった用語が広く使われるようになったのは、この後、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてであり、「逆流する資本主義」は、しばしば誤解されてきたように、「新自由主義への回帰」と同義ではない。「逆流仮説」の守備範囲ははるかに広く、一九世紀末にはじまる「帝国主義段階」という大河の流れは変わらないが、いくつかの面で大河の逆流を思わせる現象が生じていると、過去半世紀をカバーする大きな枠組みで段階論と現状分析の新たな「総合」を目指していた。言い換えると「逆流仮説」は、資本主義の「不純化」という帝国主義段階論の枠組みでは捉えきれない過去半世紀の諸現象を分析するための新たな枠組みを用意するものだった。これにより、「日本型フォーディズム」「バブル経済の崩壊」「新自由主義」「高度情報化」「サブプライム金融恐慌」「格差拡大」「労働力商品の金融化」「少子化」等々、一九九〇年代以降の新たな諸現象を次々と自由に分析批判することが可能となったのである。

それだけではない。「逆流仮説」はつねに「社会主義」と表裏の関係をなすものとして論じられている。この時期、日本では社会主義はその影響力を弱めていったが、欧米ではソビエト連邦の崩壊を契機に、マルクス・レーニン主義の桎梏から解放され、合衆国の大統領候補さえ「社会主義」を口にするほど、実にさまざまな社会主義論が息を吹き返した時代

でもあった。こうした流れを意識しながら、伊藤経済学は、資本主義の「逆流に」対抗するさまざまな社会運動が、焦点を欠いたまま、生まれては消えてゆく現実を憂え、それらを総合する独自の「社会主義」を終生模索しつづけた。それはまた、マルクス経済学に対して広く社会が期待するものでもあった。過去においてマルクス経済学の魅力が失せてきた一因は、学問的な精度を高めるために、現実の社会問題に対してダイレクトに発言することを回避してきたことにある。スターリニズムのもとでマルクス経済学がたどった負の歴史を知らない若い人たちにとっては、宇野経済学の迂回的思考はもはや現実回避の方便、理解不能な不思議な現象にしかみえないであろう。資本主義の「逆流仮説」が秘めている社会主義論との総合は、その内容に対する賛否はともかく、今日、マルクス経済学の停滞を打開する基本的な方向性を考える上で無視できない重要な意義をもっているといえよう。

横川信治

Bob Rowthorn 教授による追悼文から、伊藤先生の業績とお人柄が国際的にどのように受けとられていたかを紹介させていただきます。

伊藤誠教授の死により、日本は優れたマルクス経済学者を失いました。

伊藤教授は、信用と恐慌に関する研究で学術的キャリアを開始しました。伊藤教授のキャリアにおける転機は、1974-75年に英国と米国で研究を行う機会を得たときに訪れました。1960年代後半以降、欧米ではマルクス経済学研究の復興（マルクスルネッサンス）が進行中でしたが、この復興は日本の経済学者にはほとんど知られていませんでした。逆に、マルクス経済学への日本の貢献も欧米の研究者にはほとんど知られていませんでした。伊藤教授は、この状況を改善し、欧米と日本の政治経済学のつながりを築くため、学術的交流の範囲と深さを拡大するのに一役買いました。

伊藤教授の学術的業績では、次の三分野での貢献が重要です。

第1に、初期の業績において、伊藤教授は価値理論と信用・恐慌の理論に貢献しました。生産価格に対する彼の「3つの表のアプローチ」は、生産された価値の実体に関する最初の表から始まり、生産価格による第二の表が導き出されます。最後に、第三の表において、価値の実体が生産価格を通じてどのように再配分されるかが示されます。伊藤教授は、マルクスの全価値と全価格、全剰余価値と全利潤の一致の命題は、第一と第二の表の関係ではなく、第一と第三の表の関係として理解されるべきだと主張しました。これは重要な洞察です。

信用と恐慌の理論に関する著作の中で、伊藤教授は、マルクスの貨幣と信用の理論と恐慌理論との関係を明らかにし、投機取引と信用機構の拡大が好況の過熱と終焉に果たす役割を強調しました。

第 2 に、現状分析では、伊藤教授は、戦後の高い経済成長の終焉とそれに続く経済恐慌の根本的な原因は、労働力と一次産品の非弾力的供給と資本の過剰蓄積であったと主張しました。この恐慌の特徴は、古典的な循環恐慌とは対照的に、ブレトンウッズ体制の崩壊とともに発生した構造的恐慌であったと論じています。

さらに、国際体制再建の過程で、情報技術の進歩が資本主義の発展の歴史的パターンに 3 つの逆転をもたらしているとし唆しました：

- (1) 資本投資が軽量柔軟になることで、競争とグローバリゼーションが激化する；
- (2) 労働者がより柔軟に（そして非正規に）雇用されるにつれて、労働組合が弱体化する；
- (3) 新自由主義が登場するにつれて、国家の役割が縮小する。

第 3 に、伊藤教授は、彼の価値と信用の理論を社会主義の基本的な問題に適用しました。また伊藤教授は、社会主義の発展の段階理論を構築する中で、科学的に正しい唯一の社会主義モデルはなく、人々は社会的・歴史的条件に応じて社会主義の様々な可能性を選択でき、また現代の社会主義にとって民主主義と分権化が重要であると主張しました。

伊藤教授は、世界的な評価を持つ優れた学者で、また非常に誠実な人物でした。学術的業績の卓越さだけでなく、学派にとらわれない、また控えめな人柄によって、広く尊敬されていました。伊藤教授がなくなって大変残念です。

櫻井毅 伊藤誠君を偲ぶ

私もだいぶ歳をとってきまして友人、知人の訃報に接する機会も増えてきておりますが、中でも私より歳若い方の訃報はとりわけ寂しく哀切の思いでいっぱいになります。それは故人の生命が失われてしまうばかりでなく生前の偉業に加えるべきさらなる将来への期待をも打ち砕かれてしまうことの衝撃であると思います。まだまだ若々しく元気だった伊藤君の場合とくにそう思う気持ちは切実です。

伊藤君は、1959年3月、丁度宇野先生が定年で東京大学を退官され法政大学に移られたその同じ年の4月に大学院の修士課程に入ってこられました。私は博士過程の2年に進学した年でしたから、4年先輩ということになります。驚いたのは、伊藤君は鈴木鴻一郎先生の大学院の演習に加わったばかりなのに、はじめからよく質問し意見を臆せず述べることでした。当時、宇野演習から移籍してきた降旗節雄、岩田弘、大内秀明、阪口正雄、鎌倉孝夫、公文俊平氏などの錚々たる先輩論客の前でも動じなかったのは、ひとつには伊藤君の在籍していた時の学部の鈴木演習に、鈴木先生が一年海外留学されていた間、チューターとして鈴木ゼミに出席、指導していた降旗・岩田のお二人によって当時の先端の議論内容に慣れていたせいだったのかもしれませんが。立派な若手研究者としての風格さえ漂わせていました。

当時は長らく権威主義の支配の下で閉塞状況にあった日本のマルクス経済学の研究に、**Strum und Drang** の時代がやってきたときでもあります。宇野先生などの力で風穴が開けられ、今まで聖典化されていた『資本論』も自由に科学的研究の対象となって、研究が一気に進んだのです。我々の時代がまさにその恩恵に浴した初めで、伊藤君たちもその激動の中で自らの研究を始めたのだと思います。駒場では相原先生などに、経済学部に進学してからは鈴木ゼミを中心に、大内先生のゼミや隅谷先生のゼミにも顔を出していたと聞いております。宇野理論を受け継いだはずの鈴木ゼミの内部にも新しい解釈が芽生えて宇野理論に批判的な動きも出てきました。伊藤君はその間あまり流派にこだわらず自分の勉強をしていたのだと思います。丁度その頃六十年安保の前年で、国内も学内も騒然とした雰囲気でしたが、あまり体が丈夫そうにも見えなかった伊藤君が激しいデモの中で顔を見せていたことは一度や二度ではありませんでした。そのようにして伊藤君はマルクス主義、マルクス経済学の会得に広く努力を傾けていたのだらうと思います。

今も述べましたようにマルクスに対しても必要な批判はためらわないという研究の自由は、伊藤君の頃には、先にも述べたように、宇野理論派の中に宇野理論をも批判する雰囲気さえ醸し出し、鈴木演習の中に、鈴木＝岩田理論という一派が出来て、従来の「純粋資本主義派」に対する「世界資本主義派」として対抗するようになります。といっても鈴木ゼミの内部は和気あいあいとして激しい議論は継続されながら、宇野派としての大枠は維持されていたという状況でした。伊藤君が特に重きを置いた流れはあったでしょうが、伊藤君はむしろ 1960 年代から欧米で始まった転形問題論争に興味を持ち、さらにそれを超えた欧米の数理経済学をお巻き込んだ議論にも関心を寄せて積極的に欧米のマルクス経済学における学界の議論にも参加されました。それは「マルクス・ルネッサンス」とも呼ばれる東の間のマルクスへの国際的な関心の高まった時期でもありました。もちろん宇野理論の紹介をも含めてですが、伊藤君は日本のマルクス経済学の長年にわたる成果の蓄積の上に立って日本のマルクス経済学者として大いに発言し大いに注目を浴び学界に刺激をあたえ世界に貢献して名を残したと思います。目だたない日本人としては素晴らしいことです。

私個人としてはその頃、伊藤君と諮って転形問題のリーディングスを日本語版で出そうと計画し、山口君にも参加してもらって、東大出版会から三人の編集で『論争・転形問題』(1978)を出版したことです。解説を伊藤君と二人で書いたことなども印象に残ります。その中で伊藤君が訳した本 *Marxian Economic Theory*(1974)の著者 Meghnad Desai 氏は後に LSE の学長になった人ですが、伊藤君が最初に英語の勉強を兼ねてその家に下宿して経済学を勉強したという仲だそうで、「Desai の考えが櫻井さんの考えにとってもよく似ている」と言っていて、伊藤君が私を彼に紹介してくれて、あとで出来たばかりの本を寄贈してくれた関係でして、これもまた印象深い思い出の一つです。

私は 1980 年の 9 月だったと思いますが、山口重克君と二人でロンドンとパリに出かけて一か月近くあちこち歩きまわったことがあります。山口君が翌年留学する順番になり、その前にロンドンについて予備知識が得ておきたいから一緒に付き合ってくれないかという要

望でした。丁度その十年前に私もロンドンに十か月ほど住んだ経験があったので喜んで同行しました。その時にたまたまロンドンに留学中の伊藤君に大分お世話になったのですが、その折、伊藤君の多忙な生活ぶりを垣間見てさすが伊藤君と思ったことでした。丁度ご家族が帰国された後で、彼の借りていたフラットに何泊か泊めてもらったのですが、その前後も含めて数日彼とほとんど行動を共にして本当に大変でした。最初の晩には出版社の編集者が訪ねてきて長談義。我々二人も同席していましたが、話の内容も分からず手持無沙汰で閉口でした。翌日だったか、イギリスのマルクス経済学の学会があって、伊藤君に連れて行ってもらったのですが、結構議論が激しく、伊藤君も立ち上がって“**Speak out! Speak out!**”と絶叫して、報告者に反撃するのですが、これも仔細が分からず、長居はできませんでした。学会では何人かのイギリス人の研究者を紹介してくれましたが、その中には親しくなって、長らく文通して本など送ってくれた人もいます。また、ある日は地方の大学を案内してくれて、そこの若い学者と少し話したこともありました。そのほか、忙しいのにハイゲートの墓地にあるマルクスの有名な鑄鉄の像やその裏にある墓を見に連れていってくれたり、夜、**Royal festival hall** でクラシックの音楽会に案内してくれたり、彼の親切心は有難かったですね。

あと、東大の大学院の紛争が長引いていた頃、大学院の演習がうまく軌道に乗らず、山口、侘美、伊藤の三教授で共同の大学院演習を実施していた時期があったのですが、その時誘われて私も加わって四人で大学院の演習をやって、四人はもちろんですが、当時の多士済々の大学院学生たちと知り合ったことも忘れられないですね。私が本務校の役職の関係で三年くらいで辞めました。その後、三冊の院生の論文集を編集、発行したのも記憶に残ります。

伊藤君は日本のマルクス経済学者として世界で活躍すると同時に、日本でも本来の東大教授としての教育研究に多大の貢献を果たされたわけですが、マルクス経済学の理論だけでなく、幅広い分野での研究も行い著書も多く、私自身伊藤さんから多分 30 冊以上の本のご寄贈を受けていると思いますが、私がお返しできたのはその三分の一にも達しないだろうと忸怩たる思いが抜けません。しかも伊藤君の本はどれを見ても駄作が一冊もない。すべてが手抜きのない筋の通った堅実で魅力的な書物であって、そういうことも珍しいのではないかといつも思っていました。多分日本学士院会員としてのお仕事だったと思うのですが、「ベイシック・インカム」を扱った大きな論文があります。伊藤君がそれまでなじみのなかった領域の問題と思うのですが、その論文を読んで、その示される典拠、参考文献の豊富さ、論理展開の確実さなど、本当に誠実な仕事だと感心したことがあります。また、伊藤君は他人のためでも、やろうと思ったことは、やれるまでやるという信条の人で、晩年、最期までマルクス経済学の発展のため啓蒙運動に力を惜しみませんでした。これはなかなか余人にできることではないと、いつも感心していました。

伊藤君は晩年まで残しておいた仕事に「経済学原理」の完成があります。簡単な概説書はあるし、繰り返し講義もしていたのだから講義録の類いも残っているかもしれませんが、

まだ完成したものを私はみていません。種々の問題点についていろいろな論文などに記してはいますが、まだ正確に全体を完成されたものはないと思います。背後に方法論の問題があるので難しかったのかもしれませんが、とにかくそれが発表されないで終わったことがとても残念です。

私は最近、『資本論』第三部の読み方にもう一度よく考えてみる必要がある旨を提案しています。伊藤君の著書にも当たってみました。その問題には全く触れていません。この問題は伊藤君に是非直接に聞いておきたい問題でしたが、読んでもらうような論文が出来ていなかったのでもまだ聞いていませんでした。多少その問題に触れた論考は今年の3月に武蔵大学の『論集』に掲載されたのですが、それは伊藤君の亡くなった後でした。そのことが今一番の私の心残りです。

今年の二月、伊藤君が亡くなって何日か経っていましたが、ある日突然、何人もの友人から電話やメールが殺到した日がありました。みな伊藤君の急逝を伝えるものでした。私は知らなかったのでもあまりのことに驚愕しました。でも事実であることを信じないわけにはいきませんでした。私は伊藤君から最近頂いた本を何冊かとり出して少し読んでみたのですが、その悲しみは増すばかりでした。そしてその夜、夢を見たのです。伊藤君の夢です。

私はそういう夢は今まで見たことがないのですが、突然夢の中に伊藤君が現れました。いつものように右手を上げながら、やー！と叫んで、近づいてくる姿でした。一瞬、あの知らせは嘘だったんだ、と思った瞬間、夢の中であることが分かり、粛然としました。あんまり突然だったので、わざわざ別れを告げに来てくれたのか、とさえ思いました。あのさわやかな笑顔は、私の胸に焼き付けられたままです。最後の伊藤君の笑顔として私は永久に忘れないでしょう。伊藤君さようなら。

日本学士院会員伊藤誠東京大学名誉教授のご冥福を心からお祈り申し上げ、私の伊藤さんとの思い出の一端をご紹介します伊藤誠先生を偲ぶ会のご挨拶に代えさせていただきます。

2023年9月2日

櫻井毅

山田鋭夫 柔軟な学問的姿勢

私はレギュレーション理論によりながら現代資本主義論を勉強している者ですので、伊藤先生とは立場も学派もちがいます。その意味で、今日、この会場のなかでは変わり種と違ってよいかと思いますが、そんな私に話をする機会を与えてくださった主催者のみなさんに、まずは感謝申し上げます。

私が伊藤先生とお会いする場はほとんどが学会でした。ただし、お書きになったものは『伊藤誠著作集』（全6巻、社会評論社）をはじめ、数々の単著をお贈りいただきました。私も書いたり訳したりしたものをお送りはしましたが、とてもじゃない、受け取るものの方が圧倒的に多い次第でした。そんななか、北原勇・伊藤誠・山田鋭夫『現代資本主義をどう

視るか』(青木書店、1997年)という本で、伊藤先生とご一緒させていただいたことは、いちばん印象的なこととして鮮明な記憶に残っています。その本でもそうですが、ほかの機会でも、他学派の者にも寛大に接していただいた伊藤先生への感謝の思いをこめて、2点のみ、しゃべらせていただきます。

1 レギュラシオン理論の最良の理解者

不思議に思われる方がいるかもしれませんが、伊藤先生はレギュラシオン理論を日本に最初に紹介された方です。少なくともその1人です。しかもその紹介は、たんに外国語文献を読んで解説したというのではなく、それ以前に、実際のレギュラシオン学会に参加され報告された経験を踏まえての生々しい紹介でした。付け加えるならば、その報告では、日本経済をレギュラシオン理論の基礎概念「フォーディズム」を使って説明されており、たんなる紹介を超え、レギュラシオンを最初に応用展開した報告だったと言えます。

そのあたりの事情は「日本はポスト・フォーディズムへの調整を終えたか」(『週刊エコノミスト』1988年9月6日号、のちに伊藤『世界経済の中の日本』社会評論社、1988年、に所収)にくわしい。バルセロナで開かれたその国際レギュラシオン学会は、主催者の当初予想の10倍の参加者と報告者を得て、レギュラシオン理論が世界に認知されるきっかけとなった記念碑的な会合でした。その場で伊藤先生は、高度成長期の日本も欧米とはややちがうが「フォーディズム」だったと主張された。欧米のような生産性インデックス賃金はなかったが、労働者の実質賃金の上昇だけでなく、農家所得の上昇という点に注目して、全国的に購買力が上昇し、こうして大量生産—大量消費が実現した、と。高度成長期はまだ日本の農村人口は多かつたし、何よりも戦前日本を悩ませた農村の貧窮から脱したことに高度成長の秘密を見て、いわば「日本型フォーディズム」論を展開された。

この見方への私の賛否については今は控えますが、伊藤先生の学問的姿勢はこのように、異なる学的アプローチからも積極的かつ柔軟に吸収されていく点で、特筆に値するものだと思います。その吸収はもちろん鵜呑みでなく、伊藤的観点からの批判も含まれますが、とにかく伊藤先生自身、これを **flexible utilization** と呼んで、意識的にご自身の方法態度とされていた。ついでながら、レギュラシオン理論への言及がいちばん多いマルクス経済学者は伊藤先生だと、私は思っています。レギュラシオン理論が日本で今日なお生き延びているのは、伊藤先生に負うところ大であったわけです。

2 「逆流仮説」が提起する問題

さきに紹介した3名の共著(1997年)でも大いに議論しあったところですが、伊藤『逆流する資本主義』(東洋経済新報社、1990年)は、いろいろな問題提起にみちた本です。1970年代あたりから、資本主義はフォーディズムから新自由主義へと転換しはじめますが、伊藤先生はそれを「資本主義の逆流」という。宇野理論的にいえば、「帝国主義段階」(あ

るいはそれ以後の何らかの段階)から「自由主義段階」(自由競争)への逆流、それに加えて「原理論」的世界(資本過剰型=労賃騰貴型恐慌)への逆流だ、というわけです。

「逆流」というのは誤解を招きやすいことばだと思います。別の本では「螺旋的逆流」という語までとび出す。が、こうなると何のことだかイメージが全然わきません。結局、資本主義はどう動いているのか、それがよく見えません。が、それはともかくとして、逆流論は伊藤先生の現状分析(現代資本主義論)の核心をなしているのです、そこに含まれる方法論的問題に焦点を当ててみます。

よく、レギュラシオン理論は「原理論なき現状分析」だと批判されます。それになぞらえていえば、伊藤逆流論は「段階論なき現状分析」だと言いたい。ただしこれは批判のことばでなく、私としては評価のことばとして使っています。こういうことです。伊藤先生は宇野弘蔵の帝国主義段階論が今日、現状分析の基準たりうるかについてずいぶん悩まれた挙句、最終的には「否」との判断に至ったと推測します。ならば、現代に生きるような段階論の再構成に向かったかという、これも「否」です。結局、段階論なしで現状分析をすることになった。代わりに、レギュラシオン理論であれ、社会的蓄積構造論であれ、主に欧米左派の新しい現代資本主義論を「中間理論」として取り入れて、伊藤先生の現代資本主義論を造形されていった。しかもその到達レベルはきわめて高い。

これは何を意味するのでしょうか。私に言わせれば、宇野的な意味での段階論などなくても現状分析ができるのでないか、ということです。何よりも伊藤逆流論がそれを証明している。その意味で伊藤先生の「段階論なき現状分析」は、先生が意識していたかどうかはともかく、原理論—段階論—現状分析という宇野的三段階方法論はどこまでも固守すべき教義ではないのでないか、という問題を提起していると思われてなりません。伊藤先生は、宇野方法論をそれこそ「柔軟」に使いこなされた。ここでも **flexible utilization** の精神が遺憾なく発揮されている。そう見るのは私のひとりよがりでしょうか。

柴垣和夫 伊藤誠君を偲ぶ

伊藤君は東大経済学部で、鈴木(鴻一郎)演習とともに当時は社会科学研究所におられた大内力先生の、単位にならない演習にも参加していて、私とは大内演習の弟子仲間でした。ですから、昨年秋に、私の演習の卒業生たちが私の米寿の祝いをしてくれたときにはゲストとして来てもらい、元気な姿と声で挨拶していただきました。それだけに、それから数ヶ月にして訃報に接したときには、本当に驚きました。後輩に先立たれるというのは、不条理といえますか、何ともやりきれない感がありました。

宇野先生は、研究者のタイプを分類して都会の秀才と鈍才、田舎の秀才と鈍才と4分類され、ご自分は田舎の鈍才と思われていたようですが、伊藤君はその対極で、典型的な都会の秀才でした。それ故に身につけていた如才の無さが、そつのない学風を作ったといえるかも知れません。その点で、やや感覚的な表現を使えば、彼の論文には面白みがないのが私の不満でしたが、その優れた内容については多くのお弟子さんが紹介されましたので、

繰り返しません。ただ、私として高く評価したいのは、伊藤君が原論研究者として出発しながら、晩年には、経済学の最終目標といわれる現代資本主義や日本資本主義の現状分析に精力的に取り組んだことです。この点は、後に続く諸君に大いに見習ってほしいところです。

最後に、伊藤君の学界活動における功績として指摘したいことが、二つあります。一つはマルクス経済学、その国産品である宇野理論の国際的な普及に、昨年亡くなった関根友彦さんとともに、大きく貢献したことです。もう一つは、1960年代半ばまでの、日本のマルクス経済学界に顕著だった学派セクト主義に組みせず、学派間の建設的相互批判と交流に、積極的な役割を果たしたことです。後者の点は私もかねがね努力してきたことですが、この二点での成果は、彼が主戦場とした経済理論学会の現状に結実していると思われまふ。伊藤君、長い間本当にご苦勞様でした。あの世での再会を楽しみにしています。
(2023年9月2日)

Robert Rowthorn

Professor Makoto Itoh died from a heart attack on February 7, 2023, at the age of 86. With his death, Japan has lost a leading Marxian economist. During his lifetime, Professor Itoh published 24 books, of which 6 are available in English, and 5 have been translated into Chinese. After his retirement from the [University of Tokyo](#), he taught at Kokugakuin University, Tokyo

Professor Itoh started his academic career with his doctoral research on the business cycle and crisis. He worked out the formation of Marx's crisis theory mainly by comparing *Grundrisse*, *Theories of Surplus Value* and *Capital*. He demonstrated that Marx's over-accumulation theory of crisis appears for the first time in *Capital*. This theory asserts that a crisis occurs when capital accumulation outstrips the available supply of labour power. The credit system also plays an important role in the gestation and progression of crises. Professor Itoh's doctoral dissertation was published in 1973 as *Credit and Crisis* and was highly acclaimed in Japan.

A turning point in Professor Itoh's career came when he had an opportunity to undertake research in 1974-75 in the UK and the USA. A renaissance in the study of Marxian economics had been underway in these countries and in Europe since the late 1960s; however, this renaissance was little known to Japanese economists. At the same time, the numerous Japanese contributions to Marxian economics were little-known to Western colleagues. Professor Itoh made a great effort to remedy this situation and to build connections between Western and Japanese political economy. In his attempts to bridge the Western and Japanese traditions, he helped to expand the scope and depth of scholarly exchange among Marxian scholars.

Among his own scholarly achievements, his contributions in the following areas should be mentioned.

In his earlier works, Professor Itoh contributed to the theory of value and the theory of credit and crisis (*Value and Crisis*, Monthly Review, and Pluto, 1980, and *The Basic Theory of Capitalism*, Macmillan, 1988). On value theory, following Kozo Uno, Professor Itoh argued that prices of production are a specific form of value that is conceptually distinct from the labour-time embodied in commodities as the substance of value. His three-tables approach to the transformation problem starts from the first table on the substance of produced value. From this table, a second table containing prices of production is derived. Finally, in the third table, it is shown how the substance of value is redistributed through the prices of production. Professor Itoh then argued that Marx's propositions of equality between total value and total prices, as well as between total surplus value and total profit, should be understood as concerning the relations between the first and the third table, not between the first and the second. This is an important insight. Professor Itoh also presented new interpretations of negative value and negative surplus value, and of complex labour.

Writing on the theory of credit and crisis, Professor Itoh clarified the relationship between Marxian political economy of money and finance and the theory of crisis, emphasising the increasing role of speculative trading and the credit mechanism in bringing about the end of prosperity. Amongst his later writings on this topic is a well-informed and insightful article on the subprime crisis.

Writing on contemporary events in his book, *The World Economic Crisis and Japanese Capitalism* (Itoh 2000), Professor Itoh argued that an underlying cause of the end of high post-World War II economic growth, and of the 1973-75 economic crisis which followed it, was the over-accumulation of capital in relation to an inelastic supply of both labour power and primary products. As this occurred during the breakdown of the Bretton Woods international monetary system, the main feature was an inflationary crisis as opposed to the classic cyclical crisis.

Looking to the future, Professor Itoh suggested that the advances in information technology that accompanied the process of restructuring were inducing three reversals in the historical pattern of capitalist development that had prevailed during the 20th century: (1) capital investment was becoming lighter and flexibly mobile, thus intensifying competition and globalisation; (2) trade unions were being weakened as workers were more flexibly (and irregularly) employed; (3) the role of the state was being reduced, as the era of neoliberalism emerged.

Finally, Professor Itoh applied his theory of value and crisis to the basic issues of socialism (*Political Economy for Socialism*, Macmillan, 1995). Adopting his theory of the transformation problem, he argued that if Lange's trial and error method can be used to achieve equilibrium prices in a socialist economy, then the relationship between embodied labour time and socialist prices can be fully specified. He also argued that his theory of money and finance could be applied to a socialist economy. Building a stages theory of socialist development, Professor Itoh argued that a single model of socialism should not be defined as the uniquely correct scientific path to be followed; various possibilities for socialism might be chosen by people according to their social and historical conditions. He reiterated this view many years later in his Youtube contribution to the debate following the launch of "Through Pluripolarity to Socialism - A Manifesto" (2021), where he argued that democracy and decentralisation are fundamental to modern socialism. He took a rather sceptical view of the Chinese model. Professor Itoh was a fine scholar with a global reputation. He was also a person of great integrity and remained loyal to his democratic socialist beliefs throughout his adult life. He was widely admired, not just for the quality of his scholarship, but also for his non-sectarian and modest demeanour. He will be greatly missed.

Costas Lapavistas コスタス・ラパヴィツァス (ビデオメッセージ)

 YouTube https://www.youtube.com/watch?v=vWxW-y2b3_w